(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2005-350988
(P2005-350988A)
(43)公開日　平成17年12月22日(2005.12.22)

(51)Int.Cl.[7]	F I		テーマコード（参考）
E04D 1/04	E04D 1/04	L	
E04D 12/00	E04D 1/04	E	
	E04D 12/00	B	

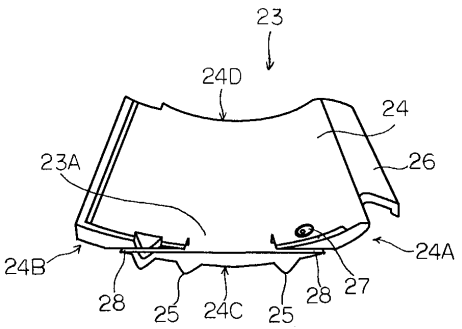
審査請求 未請求　請求項の数 4　ＯＬ　（全 11 頁）

(21)出願番号　特願2004-173916 (P2004-173916)
(22)出願日　平成16年6月11日 (2004.6.11)

(71)出願人　503190567
石川瓦工業株式会社
群馬県太田市新道町４６番地３
(74)代理人　100098361
弁理士　雨笠　敬
(72)発明者　石川　好男
群馬県太田市新道町４６番地３　石川瓦工業株式会社内

(54)【発明の名称】瓦及び瓦係止桟

(57)【要約】
【課題】　屋根の軒に対し略平行に延在する瓦係止桟で容易に保持することができる波形瓦を提供する。
【解決手段】　屋根２０の野地板２１上面に設置される瓦２３であって、裏面に突設され、屋根２０の軒２０Ａに対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟１０の保持部１２に挿入係合される係止突部２５を瓦２３に設ける。瓦２３には一側端面に形成され、瓦係止桟１０の係止片１４が挿入係合される係止溝２８を設ける。上方に開口した保持部１２が底部に形成されると共に、奥側から手前側に向けて延在する係止片１４が上端に形成された瓦係止桟１０を設ける。瓦係止桟１０の係止片１４を瓦２３の係止溝２８に挿入し係合する。
【選択図】　図１



【特許請求の範囲】
【請求項１】
屋根の野地板上面に設置される瓦において、
裏面に突設され、前記屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の保持部に挿入係合される係止突部と、
一側端面に形成され、前記瓦係止桟の係止片が挿入係合される係止溝とを備えたことを特徴とする瓦。
【請求項２】
屋根の野地板上面に設置される瓦において、
裏面に突設され、前記屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の保持部に挿入係合される係止突部と、
一側端面に形成され、上面に前記瓦係止桟の係止片が係合される段差部とを備えたことを特徴とする瓦。
【請求項３】
Ｊ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦であることを特徴とする請求項１又は請求項２の瓦。
【請求項４】
弾性を有して前記屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられ、上方に開口した前記保持部が底部に形成され、奥側から手前側に向けて延在する前記係止片が上端に形成されていることを特徴とする請求項１、請求項２又は請求項３の瓦を保持するための瓦係止桟。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、屋根の野地板上面に設置される瓦に関するものである。
【背景技術】
【０００２】
従来より木材にて構成され屋根の下地材である野地板の上面に、屋根の上縁から下縁方向に所定の間隔で配設し釘で打ち付けられた瓦係止桟に、瓦の上端下面に所定寸法突出して設けられた係止突部を引掛けて順次瓦を整然と並べながら葺いていた。該葺き上げられた瓦のうち大半の瓦は台風等の大風や地震などの震動によって動いたり吹き飛ばされてしまうのを防止するため、瓦を葺く際予め瓦に設けられた釘穴に釘を打ち付けて瓦を固定していた。このようにして、葺いた瓦が風や振動などで動いたり吹き飛ばされてしまうのを防止していた。
【０００３】
しかし、瓦に設けられた釘穴に釘を打ち付けて瓦を固定する場合、一方の手で釘を持ち他方の手でハンマーを持って釘を打ち付けなければならなかった。このため、瓦葺きの施工作業が極めて煩雑であった。このような、瓦葺きの煩雑な施工作業を解消するため、耐腐食性を有する軽量の金属材にて、瓦の高さより若干高く形成した基準当片と、この基準当片の下端部を左右方向に直角状に形成した固止片と、基準当片の上端部を左方に折曲した係止片及び係止片の右方に折り曲げた係止片とを一体に形成した位置規制部材を瓦桟に取り付け、この位置規制部材に設けた係止片で瓦の差込み側上面を押さえて、大風等による瓦の浮き上がりを防止できるように構成していた（特許文献１参照）。
【０００４】
この場合、位置規制部材は一枚の瓦にそれぞれ対応して瓦桟に取り付けていたので、大風等による瓦の浮き上がりを防止することができるものの、今度は位置規制部材の取り付け作業が煩雑となってしまう。そこで、瓦葺き及び位置規制部材の取り付け作業の煩雑さを解消できる方法も考えられる。この場合、屋根の軒に対し略平行に延在させた弾性を有する瓦係止桟を断面略コ字状に形成し、この瓦係止桟に瓦の一側より下方に突設した係止突部が係合する保持部を設け、この保持部に瓦の係止突部を保持し、瓦の上面を瓦係止桟

に設けた係止片で係合する。これにより、屋根の軒に対し略平行に延在させた瓦係止桟に複数枚同時に瓦を保持することができるので、瓦葺き及び位置規制部材の取り付け作業が煩雑になるのを解消することができるようになる。

【特許文献１】特開平９－１３７５５１号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【０００５】

しかしながら、複数枚同時に瓦を保持させるために断面略コ字状の瓦係止桟を屋根の軒に対し略平行に延在させており、瓦係止桟に設けた保持部の高さは一定であった。このため、瓦係止桟に設けた係止片の高さを平瓦の上面を係止できるように合わせると、波形瓦の上面は平瓦より高くなるため、瓦係止桟の係止片で係止することができない。

【０００６】

そこで、平瓦は勿論のこと屋根の軒に対し略平行に延在する瓦係止桟で容易に保持することができる波形瓦の開発が望まれていた。

【０００７】

本発明は、係る従来技術の課題を解決するために成されたものであり、屋根の軒に対し略平行に延在する瓦係止桟で容易に保持することができる波形瓦を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【０００８】

即ち、本発明の瓦によれば、屋根の野地板上面に設置されるものであって、裏面に突設され、屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の保持部に挿入係合される係止突部と、一側端面に形成され、瓦係止桟の係止片が挿入係合される係止溝とを備えたことを特徴とする。

【０００９】

また、請求項２の発明の瓦は、屋根の野地板上面に設置されるものであって、裏面に突設され、屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の保持部に挿入係合される係止突部と、一側端面に形成され、上面に瓦係止桟の係止片が係合される段差部とを備えたことを特徴とする。

【００１０】

また、請求項３の発明の瓦は、請求項１又は請求項２において、Ｊ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦であることを特徴とする。

【００１１】

また、請求項４の発明の瓦を保持するための瓦係止桟は、請求項１、請求項２又は請求項３において、弾性を有して屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられ、上方に開口した保持部が底部に形成され、奥側から手前側に向けて延在する係止片が上端に形成されていることを特徴とする。

【発明の効果】

【００１２】

以上詳述した如く本発明によれば、屋根の野地板上面に設置されるものであって、裏面に突設され、屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の保持部に挿入係合される係止突部と、一側端面に形成され、瓦係止桟の係止片が挿入係合される係止溝とを備えたので、例えば瓦の係止溝に屋根の野地板上面に固定された請求項４のような瓦係止桟の係止片を挿入し係止するだけで、瓦を瓦係止桟に容易に保持することができる。これにより、平瓦を含む請求項３の如きＪ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦を野地板上面に取り付けた瓦係止桟の係止片に容易に保持することができる。従って、瓦葺きの作業性を大幅に向上させることができるようになる。

【００１３】

特に、野地板上面に屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けた瓦係止桟にＪ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦であっても保持することができるので、これらの瓦が動いて

しまうのを確実に防止することが可能となる。従って、大風や振動などによって瓦が浮き上がって吹き飛ばされてしまうなどの不都合を確実に防止することができる。

【００１４】

また、請求項２の発明によれば、屋根の野地板上面に設置されるものであって、裏面に突設され、屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の保持部に挿入係合される係止突部と、一側端面に形成され、上面に瓦係止桟の係止片が係合される段差部とを備えたので、例えば瓦の段差部に屋根の野地板上面に固定された請求項４のような瓦係止桟の係止片で押さえ付けるだけで、瓦を野地板上面に容易に保持することができる。これにより、平瓦を含む請求項３の如きＪ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦を野地板上面に取り付けた瓦係止桟の係止片に容易に保持することができる。従って、瓦葺きの作業性を大幅に向上させることができるようになる。

【００１５】

特に、野地板上面に屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けた瓦係止桟にＪ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦の段差部を保持することができるので、これらの瓦が動いてしまうのを確実に防止することが可能となる。従って、大風や振動などによって瓦が浮き上がって吹き飛ばされてしまうなどの不都合を確実に防止することができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【００１６】

本発明は、大風や振動などによって瓦が浮き上がり吹き飛ばされてしまう不都合を防止するため、瓦に屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の係止片が挿入係合される係止溝を設けたことを特徴とする。瓦が大風で吹き飛ばされてしまうのを防止するという目的を、瓦に瓦係止桟の係止片が挿入係合される係止溝を設けることで実現した。

【実施例１】

【００１７】

次に、図面に基づき本発明の実施の形態を詳述する。図１は本発明の一実施例を示す瓦２３の斜視図、図２は同図１の瓦２３の要部拡大側面図をそれぞれ示している。

【００１８】

瓦２３は、波形瓦（Ｊ形瓦やＦ形２山タイプ瓦などの波形の瓦）或いは平瓦（Ｆ形瓦やＦ形防災瓦などの略平らな瓦）等複数の形状があり、この内のＪ形瓦（以降瓦２３と称す）は、図１に示すように上面略矩形状に本体２４が形成されると共に、この本体２４は、両端を基準に横断面略中央部を所定寸法下方に湾曲させた湾曲形状を呈している。本体２４の上端２４Ｃ（図１下側）には、所定の間隔を存して所定の厚さの係止突部２５が２個所設けられており、この係止突部２５は、本体２４裏面に所定寸法突出している。尚、本体２４の一側２４Ａ（図中右側）には下端２４Ｄ（図中上側）から上端２４Ｃに所定寸法延在する所定幅の重合部２６が設けられている。

【００１９】

該本体２４の一側端面となる上端２４Ｃ面には、所定の幅の係止溝２８が略一直線に形成されており、この係止溝２８は本体２４の下端２４Ｄ方向に所定寸法凹陥形成（図２に図示）されると共に、上端２４Ｃ面の一側２４Ａから他側２４Ｂ方向（図中左右方向）に延在している。該係止溝２８の幅方向一側（瓦２３の下面２３Ｂ方向）は、本体２４の横断面略中央部の瓦２３の上面２３Ａに接して形成されると共に、幅方向他側は横断面略中央部の上面２３Ａより所定寸法離間して形成されている。

【００２０】

係止溝２８は、本体２４を湾曲形状に形成した瓦２３の上端２４Ｃ面に略一直線に形成しており、この係止溝２８は両係止突部２５、２５間の瓦２３の上面２３Ａ側を開口すると共に、その両側は本体２４を貫通し、瓦２３の下面２３Ｂ側に貫通しそこで開口している。また、瓦２３には木材にて構成された従来の瓦係止桟（図示せず）に釘を打ち付けて固定するための釘孔２７（図１に図示）が設けられている。即ち、本体２４の一側端面となる上端２４Ｃ面に係止溝２８を設けると共に、この係止溝２８を後述する瓦係止桟１０

に形成した係止片１４に挿入可能に構成している。

【００２１】

該瓦係止桟１０は、屋根２０（図７に図示）の野地板２１上面に固定されて、瓦２３の係止突部２５を係合すると共に係止溝２８を係止するもので、屋根２０の軒２０Ａに対し略平行に設けられ、軒２０Ａの一側端部から他側端部まで延在している。また、瓦係止桟１０は図３、図４に示すように底部１３に瓦２３の係止突部２５が係合される保持部１２と、瓦２３の係止溝２８内に挿入される係止片１４とから構成されている。

【００２２】

該瓦係止桟１０は、例えばステンレス板、或いは、リンセイ銅板などの容易に錆びない弾性を有する金属板材にて構成されると共に、保持部１２と係止片１４は折曲された金属板材にて一体に構成されている。また、保持部１２は野地板２１に固定される底片１２Ｂと、この底片１２Ｂの一側が折り曲げられて立設された後片１２Ｃと、底片１２Ｂの他側が折り曲げられて立設された前片１２Ａとから断面略コ字状に形成されている。尚、底片１２Ｂには図示しないが底片１２Ｂを野地板２１に固定するための釘穴が設けられている。

【００２３】

該前片１２Ａと後片１２Ｃとの間は、瓦２３の係止突部２５の厚さと略同等の間隔にて構成されており、この隙間によって前片１２Ａと後片１２Ｃとの間に瓦２３の係止突部２５をガタ付き無く係合できるように構成している。この前片１２Ａは、保持部１２にて係止突部２５を保持した状態で、瓦２３の下面２３Ｂに当接しない短い寸法に構成されている。

【００２４】

また、後片１２Ｃは、保持部１２にて瓦２３の係止突部２５を保持した状態で、本体２４に設けた係止溝２８まで延在しており、この後片１２Ｃ上端に前記係止片１４が設けられている。該係止片１４は、後片１２Ｃ上端が略直角に折曲されて所定寸法前片１２Ａ側に延在すると共に、底片１２Ｂと略平行に延在している。該係止片１４の長さは係止溝２８の深さと略同じに構成している。詳しくは、係止片１４の長さ寸法は係止溝２８の深さと略同等、或いは、少許短い寸法に構成されている。

【００２５】

そして、このように構成された瓦係止桟１０を、図５に示すように屋根２０の下地材としての野地板２１（この場合、図示しないが野地板２１上面に防水シートが設けられている）上面に、配置されると共に、瓦係止桟１０は軒２０Ａに対し略平行に配置される。係る瓦係止桟１０は、屋根２０の雨の流れ方向に葺き上げすべき瓦２３に対して所定の間隔を存して敷設される。

【００２６】

この場合、瓦係止桟１０は保持部１２の前片１２Ａを軒２０Ａ側、後片１２Ｃを軒２０Ａと反対側に位置して敷設される。そして、保持部１２の底片１２Ｂに設けた図示しない釘穴に釘３５（図６に図示）が打ち付けられる。これによって、図７に示すように野地板２１上面に瓦係止桟１０が所定の間隔で固定される。このとき、瓦係止桟１０は係止片１４の寸法を底片１２Ｂの寸法より小さい寸法に構成しているので、釘穴に釘３５を打ち付ける際、係止片１４が殆ど邪魔にならず底片１２Ｂの釘穴に釘３５を打ち付けることができる。

【００２７】

そして、野地板２１上面に瓦係止桟１０を所定の間隔で釘３５を打ち付けて固定した後、瓦係止桟１０に瓦２３を係合させる。この場合、瓦２３の上端２４Ｃ側の下面２３Ｂに突設した係止突部２５を瓦係止桟１０の底部１３に設けた保持部１２に係合させることになるが、まず、瓦２３の上端２４Ｃ面で係止片１４を前片１２Ａの離間方向に押す。これによって、係止片１４は図８矢印で示すように前片１２Ａの離間側方向に弾性変形させる。このとき、後片１２Ｃは前片１２Ａとの間隔を、係止突部２５を挿入できる寸法以上大きく弾性変形させないように注意しながら弾性変形させる。この場合、弾性を有する金属

板材にて瓦係止桟１０を構成しているので、係止片１４を容易に弾性変形させることができる。

【００２８】

そして、前片１２Ａの上端と後片１２Ｃとの隙間が係止突部２５を挿入できる幅まで開いたら、係止突部２５を前片１２Ａと後片１２Ｃとの隙間に挿入する。これによって、瓦係止桟１０の保持部１２に瓦２３の係止突部２５が保持され、係止片１４は本体２４の係止溝２８に位置する。本体２４の係止溝２８に係止片１４が位置すると、係止片１４は図９に示すように前片１２Ａ方向に弾性復帰する。係止片１４が弾性復帰すると係止片１４は瓦２３本体２４の上端２４Ｃに設けた係止溝２８に挿入され係止される。即ち、瓦２３の係止突部２５が瓦係止桟１０の保持部１２に保持され、係止溝２８に係止片１４に係止されることにより、瓦２３が振動や風等の外力によって動いてしまうのを確実に防止している。

【００２９】

そして、図１０に示すように複数の瓦２３本体２４の上端２４Ｃに設けた係止溝２８が瓦係止桟１０の係止片１４にそれぞれ挿入されて係止されることにより、野地板２１の上面全体に瓦葺きが行われる。この時、本体２４一側２４Ａに設けた重合部２６を隣接する瓦２３の重合部２６の反対側の上面２３Ａに重合させると共に、瓦２３の上端２４Ｃ上面２３Ａに隣接する上流側の瓦２３の下端２４Ｄ側の裏面を所定寸法重合させる。

【００３０】

このように、本体２４の裏面に突設され、屋根２０の軒２０Ａに対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟１０の保持部１２に、挿入係合される係止突部２５と、一側端面に形成され、瓦係止桟１０の係止片１４が挿入係合される係止溝２８を瓦２３に備えているので、瓦２３の係止溝２８に屋根２０の野地板２１上面に固定された瓦係止桟１０の係止片１４を挿入するだけで、瓦係止桟１０に瓦２３を容易に係合保持することができる。これにより、瓦葺きの作業性を大幅に向上させることができるようになる。

【００３１】

また、瓦２３の係止突部２５を瓦係止桟１０の保持部１２に係合し、係止溝２８に係止片１４を係止しているだけなので、瓦葺き作業に不慣れな施工者であっても葺いた瓦２３にズレなどが発生することもなく、信頼性の高い瓦葺きを行うことができる。これにより、瓦係止桟１０に保持した瓦２３が動いてしまうのを防止することができるので、地震や風等の外力によって瓦２３が動いたり飛んだりしてしまうなどの不都合を確実に防止することができる。

【実施例２】

【００３２】

次に、図１１には本発明の他の実施例の瓦２３を示している。屋根２０の野地板２１上面に固定された瓦係止桟１０及び瓦２３は前述の実施形態と略同じ構成を有している。以下、異なる部分について説明する。尚、前述の実施の形態と同じ部分にはこれと同じ符号を付し、説明を省略する。瓦２３は、図１１に示すように波形のＦ形２山タイプ瓦（以降瓦２３と称す）で、この瓦２３も瓦係止桟１０の係止片１４にて係止できるように構成されている。

【００３３】

該瓦２３は、実施例１同様本体２４上面が略矩形状に形成されている。本体２４は、横断面を略４等分した状態で平面に形成された平面部３０を２個所、上方に湾曲した湾曲部３１を２個所形成し、平面部３０と湾曲部３１とを交互に配置した形状を呈している。本体２４の上端２４Ｃには、前述同様の係止突部２５が２個所設けられており、この係止突部２５は両平面部３０の裏面側に設けられると共に下方に設けて所定寸法突設している。尚、本体２４一側２４Ａ（図中右側）には前述同様に下端２４Ｄから上端２４Ｃに渡って延在する重合部２６が設けられている。

【００３４】

該本体２４の一側端面となる上端２４Ｃには、所定の幅の係止溝２８が略一直線に形成

されており、この係止溝２８は本体２４の下端２４Ｄ方向に所定の寸法凹陥形成（図１２に図示）されると共に、上端２４Ｃの一側２４Ａから他側２４Ｂ方向（図中左右方向）に延在している。該係止溝２８の幅方向一側（瓦２３の下面２３Ｂ側）は、平面部３０の上面に略面一に形成されると共に、幅方向他側（瓦２３の上面２３Ａ側）は湾曲部３１が所定寸法切り欠かれて平面部３０上より所定寸法離間して形成されている。

【００３５】

該係止溝２８は、本体２４に平面部３０と湾曲部３１とを交互に形成した瓦２３の上端２４Ｃ面に、平面部３０上に接して略一直線に形成している。また、瓦２３には木材にて構成された従来の瓦係止桟（図示せず）に釘を打ち付けて固定するための釘孔２７（図１１に図示）が設けられている。即ち、本体２４の一側端面（上端２４Ｃ面）に係止溝２８を設けると共に、この係止溝２８を瓦係止桟１０に形成した係止片１４に挿入可能に構成されている。

【００３６】

そして、瓦２３の係止溝２８を屋根２０の野地板２１上面に固定された瓦係止桟１０の係止片１４に挿入する。これにより、瓦係止桟１０に瓦２３を容易に係合保持することができるようになる。従って、瓦係止桟１０に保持した瓦２３が動いてしまうのを容易に防止することができるので、地震や風等の外力によって瓦２３が動いたり飛んだりしてしまうのを確実に防止することができる。この場合、瓦２３の係止突部２５を瓦係止桟１０の保持部１２に保持し、係止溝２８に係止片１４を係止しているだけなので、瓦葺き作業に不慣れな施工者でも葺いた瓦２３にズレなどが発生することもなく、信頼性の高い瓦葺きを行うことができる。従って、瓦葺きの作業性を大幅に向上させることができるようになる。

【実施例３】

【００３７】

次に、図１３には本発明の他の実施例の瓦２３を示している。瓦２３は実施例１の波形瓦（Ｊ形瓦）を一部変更している。以下、異なる部分について説明する。尚、前述の実施の形態と同じ部分にはこれと同じ符号を付し、説明を省略する。該瓦２３は、図１３に示すように本体２４の上端２４Ｃ側に、瓦２３の上面２３Ａ側を切り欠いた段差部３３を設けている。

【００３８】

該段差部３３は、本体２４の上端２４Ｃに略一直線に形成した係止溝２８の幅方向他側（瓦２３の上面２３Ａ側）を切り欠いて形成している。即ち、瓦２３の上端２４Ｃには、本体２４に形成した係止溝２８を含む瓦２３の上面２３Ａ側を切り欠いて図１４に示すような段差部３３を設けている。この段差部３３に、係止溝２８同様瓦係止桟１０に形成した係止片１４を係止し、瓦２３を瓦係止桟１０に保持固定している。即ち、瓦２３の係止突部２５が瓦係止桟１０の保持部１２に保持され、段差部３３が係止片１４に係止されることにより、瓦２３は瓦係止桟１０に保持されている。

【００３９】

このように、本体２４上端２４Ｃの上面２３Ａ側を所定寸法切り欠いて、瓦係止桟１０に形成した係止片１４を係止可能な段差部３３を設けているので、前述同様瓦２３の段差部３３を屋根２０の野地板２１上面に固定された瓦係止桟１０の係止片１４で係止することができる。即ち、瓦係止桟１０の保持部１２に係止突部２５を保持し、係止片１４で瓦２３に設けた段差部３３を係止するだけで、瓦係止桟１０に瓦２３を容易に係合保持することができる。これにより、前述同様の効果を得ることができる。尚、実施例１、及び、実施例２の瓦２３に段差部３３を設けても本発明は有効である。

【００４０】

一方、各実施例では、係止溝２８の幅方向一側（瓦２３の下面２３Ｂ側）は、図１５に示すような平瓦であるＦ形瓦（瓦２３）や図１６に示すようなＦ形防災瓦（瓦２３）の上面２３Ａと同一寸法に形成している。このように、係止溝２８の下面側を平瓦（Ｆ形瓦やＦ形防災瓦）２３の上面２３Ａと同一寸法に形成することにより、図１７に示すように瓦

係止桟１０に設けた保持部１２に瓦２３の係止突部２５を保持し、係止片１４で瓦２３の上面２３Ａを係止することができる。即ち、同一の瓦係止桟１０の保持部１２にて波形瓦（Ｊ形瓦及びＦ形２山タイプ瓦）や平瓦（Ｆ形瓦及びＦ形防災瓦）の係止突部２５を保持した状態で、係止片１４にて波形瓦の係止溝２８或いは段差部３３と、平瓦の上面２３Ａを係止することができる。これにより、波形瓦及び平瓦を同一の瓦係止桟１０で確実に保持することができるので、地震や風等の外力によって瓦２３が動いたり飛んだりしてしまう不都合を確実に防止することができる。

【００４１】

尚、実施例では、瓦２３の上端２４Ｃに係止溝２８及び段差部３３を設けたが、係止溝２８及び段差部３３は本発明の要旨を逸脱しない範囲で他の様々な変更を行うことができるのは云うまでもない。

【００４２】

また、瓦２３を湾曲したＪ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦を含む波形瓦で説明したが、瓦２３はこれら湾曲した波形瓦に限らず本発明の要旨を逸脱しない範囲の矩形波状或いは矩形波に近似した瓦であれば本発明を適用しても有効であることは云うまでもない。

【図面の簡単な説明】

【００４３】

【図１】本発明の一実施例を示す瓦の斜視図である（実施例１）。

【図２】同図１の瓦の要部拡大側面図である。

【図３】本発明の瓦係止桟の斜視図である。

【図４】同図３の瓦係止桟の側面図である。

【図５】屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の側面図である。

【図６】釘孔に釘の打ち付ける状態を示す瓦係止桟の側面図である。

【図７】屋根の軒に対し略平行に延在して取り付けられた瓦係止桟の斜視図である。

【図８】裏面に突設した係止突部を係合させる状態を示す瓦係止桟の側面図である。

【図９】保持部に係止突部が係合され、上端の上面が係止片で係止された瓦の側面図である。

【図１０】瓦係止桟を用いて屋根に葺いた瓦の側面図である。

【図１１】本発明の他の実施形態に係る瓦の斜視図である（実施例２）。

【図１２】同図１１の瓦の要部の拡大図である。

【図１３】本発明の他の実施形態に係る瓦の斜視図である（実施例３）。

【図１４】同図１３の瓦の要部の拡大図である。

【図１５】本発明の実施形態に係る瓦（Ｆ形瓦）の斜視図である。

【図１６】本発明の実施形態に係る瓦（Ｆ形防災瓦）の斜視図である。

【図１７】同図１５、図１６の瓦の要部の拡大図である。

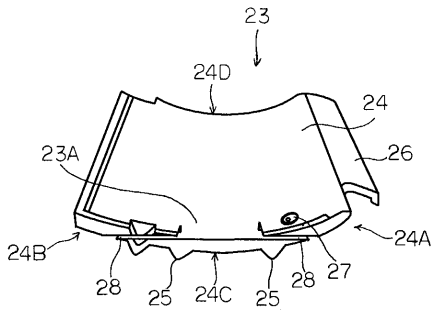
【符号の説明】

【００４４】

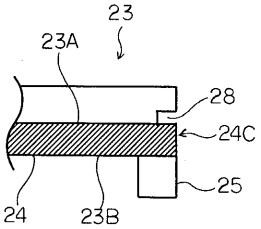
１０　瓦係止桟
１２　保持部
１３　底部
１４　係止片
２０　屋根
２１　野地板
２３　瓦（Ｆ形瓦、Ｊ形瓦、Ｆ形２山タイプ瓦）
２３Ａ　上面
２３Ｂ　下面
２４　本体
２４Ｃ　上端
２５　係止突部
２６　重合部

２８　係止溝
３１　湾曲部
３３　段差部

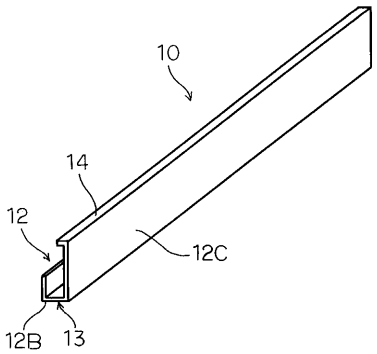
【図１】



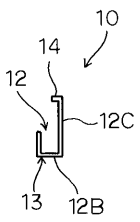
【図２】



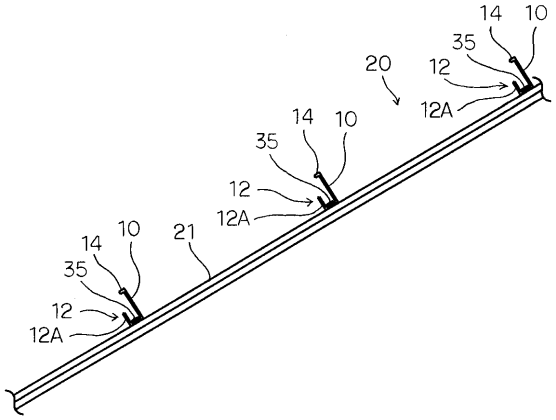
【図３】



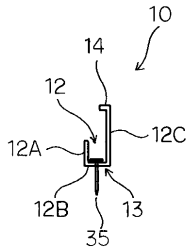
【図４】



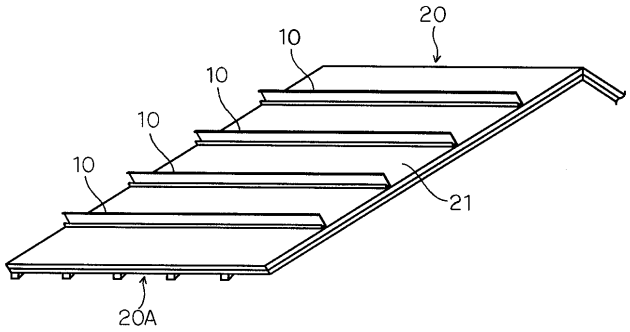
【図５】



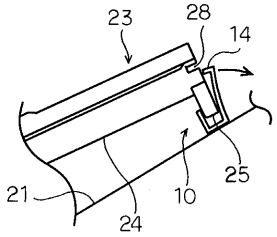
【図６】



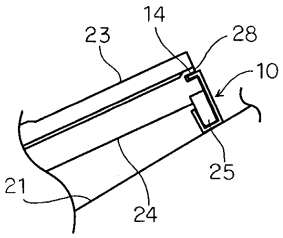
【図７】



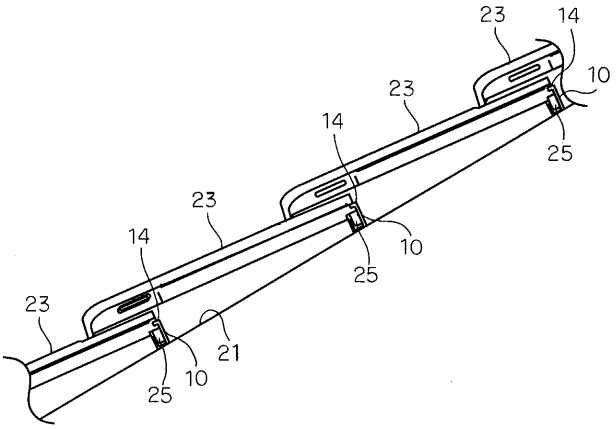
【図８】



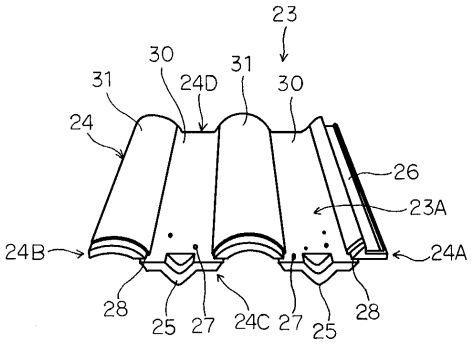
【図９】



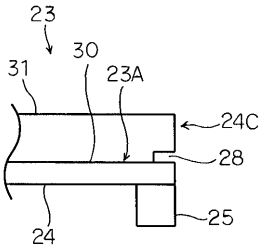
【図１０】



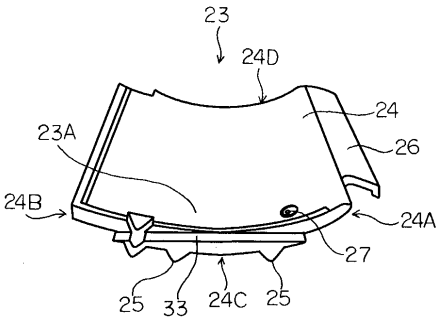
【図１１】



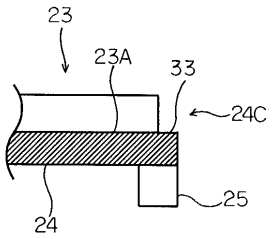
【図１２】



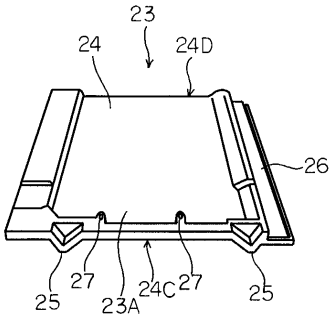
【図１３】



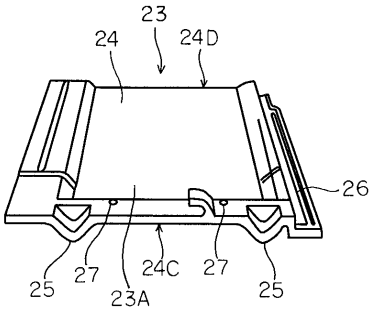
【図１４】



【図１５】



【図１６】



【図１７】

